美的規範の成立と変容

── 共同主観と個人の主体的関与との関係を中心として ──

柴田　庄一

はじめに

「美とは何か」を考察するに当たっては、当然の課題として、「美」の概念、およびその具体例の検討が考えられるが、後者については、他の章で多角的に取り扱われるので、ここでは、「美」の概念が含む意味の幅を確認した上で、とりわけ「美的規範」がどのようにして成立し、またどのようなメカニズムによって変容するのかに焦点を当てて、いわゆるメタレベルの考察を加えてみたい。

われわれが、「美しさ」に想いを致すとき、その卑近な例として、「美人」や「花の美」を想い描くことはもとより容易（たや）すい。とはいえ、「美徳」や「美味」等々の表現にも見られる通り、「美」は必ずしも「見栄え」などの視覚にばかり依存するのではなく、何がしか価値意識とも連動している点が忘れられてはならない。「わたし」にとっての「花の美」や「美人」の像は、むろん個人的な嗜好として具体的なものではあるが、それが、「好ましく」また「望ましい」ものとして意識されるとき、そこには幾分なりとも抽象的な「価値観」の裏打ちが随伴しているのである。

「価値」とは何か

では、そもそも「価値」とは何であろうか？仮に「価値」を個人的な価値意識にのみ閉じ込めるのではなく、社会性との関連の中で捉えようとすると、その手掛かりとして、「使用価値」と「交換価値」との対比が参考になろう。たとえば、「わたしの腕時計」は、通常、わたしにとって「腕時計」として機能すれば（使用価値）、それで何の不足もないものではあるが、何らかの事情で飲食代

のカタに取られる場面を想定すれば、はたしていかほどの「交換価値」を持つものであるかが、にわかに焦点化されることとなる。その際、「交換価値」は、むろん当方の一存で決められるものでは決してありえない。それというのも、利害を異にする交渉相手との間に「交換」が成立しない限り、わたしの主張する「交換価値」は一文の値打ちすら持たないからである。しかし、わたしと相手との交渉が、単にふたりだけの個人同士の交渉に終始するのかと言えばそうとばかりも言い切れない。「交換価値」が、さらに第三者との交換可能性を想定し、ひいては、二人が所属する共同社会に共通の価値尺度をも意識して測られるものである限り、それはまた、社会の共同主観とも相関していると見なければならない。

「共同主観」の所在

共同主観の所在を考える格好の具体例として、ここでは、いささかの顰蹙を買うのをあえて承知で「美人コンテスト」を引き合いに出してみよう。周知のように、コンテストの美人は、通常、審査員の合議によって決定される。しかし、各人が思い描く美人像と第１位に選ばれる美人とがぴったり合致するのはむしろ稀なことであろうと考えられる。――その稀なケースとは、満場一致の場合だけである。――まして、審査員ならぬ一般観客の推測する予想が「イマドキの美人」を言い当てることなどほとんど至難の業であるのが一般的だ。

それはまた、流行を予測することの困難さとさして変わらない。その時々の人気とは、むろん共同社会の大多数が抱懐する共通の価値意識の現われではあろうが、その所在は、潜在的であるがゆえに、もっぱら事後的な解明が可能なだけで、必ずしも初手から分明であるとは言い難い。むしろ個人の予測と共同主観の所在との間には、一定のズレないし相応の齟齬が生じるのが常態であると言っていい。

価値判断の尺度

社会的な価値意識、すなわち「交換価値」を測るには、通常、共通のガイドラインが必要とされる。その具体例として、われわれは、ファッションモデルや「気になるアイドル」の存在を挙げることができよう。こうした様々な身近なモデルを手掛かりに、価値判断の尺度や流行の行方が瀬踏みされるのである。とはいえ、流行に対しては、帰依一辺倒ではなく、同時にまた反発も見られる

のが一般的である通り、個人主観と共同主観とは、ともすれば角逐するのがふつうであろう。そこでは、いくたりかのアイドルが各々「わたしのアイドル」たり得るし、また、各種の趣味嗜好がそれぞれ固有の価値を主張しうるからである。ところが、モデルが単なる個別のモデルとしてではなく、それ自体が絶対的な価値尺度となり、規範化するという事態が起こりうる。すなわち規範的価値の成立がそれである。（参照例：八頭身美人、「ミロのヴィーナス」等々の古典的規範）

規範的価値の超越的性格

規範としての価値意識は、その順路として様々な具体的モデルから析出されて成立するものと想定される。しかし、いったん成立した価値規範は、同等と見まがう諸価値を排除しつつ自ら超越的存在となるのが特徴である。そのことを考えるヒントとして、「貨幣」の成り立ちを考えてみることが参考になろう。

貨幣の原型として、たとえば貝殻や金銀を取り上げると、それらは、交換の道具として、文字通り「交換価値」を持つとともに、他方では「装飾品」等々としてそれ自体の「使用価値」をもなお含み持っていると見なすことができる。ところが、貨幣が規範化すると、すなわち、ひたすら交換の尺度としての意味しか持たなくなると、貨幣はたちまち固有の使用価値を消失し、もっぱら交換価値だけの存在と成り了（おお）せる。こうして、貨幣は貨幣と化すことによって、それぞれの使用価値を有するその他諸々の個物を排除しつつ、自らを超越化させてしまうに至るのである。

貨幣の成立による価値尺度の体系化は、また、美的規範の成立のメカニズムの内にも見出すことができる。例えば「わたしのアイドル」は、もとより隣のお姉さんであっても何ら構わないが、時代の美的寵児となる「カリスマ」は、近寄りがたいオーラを放っていなければならず、決してわれわれと同等のだれかれであってはならない。そうでなければ、それは、何ら超越的な「規範」とはなりえないし、まして価値規範の体系化などとうてい覚束ない相談だからである。こうして、体系の頂点に立つのは、「われわれ」に超越する存在以外ではありえない。――その代表的な一例として「象徴天皇制」を挙げることができよう。――

規範的価値の超越性は、その体現者がわれわれのいずれとも異なる存在に他ならないという意味で、また抽象性とも表裏一体のものである。それはおそら

く、具体的な「われわれ」ひとりひとりの単なる総和以上のものであり、そうであるがゆえに、ひとはそこにそれぞれの想いや嗜好を投影することができ、同時にまた、様々な夢を汲み出してくることができるのであろう。

規範的価値の支配は宿命的か？

ところで、価値規範の体系化は、また価値尺度の階層化と無縁ではない。したがって、規範的価値は、価値を測る尺度として機能するとともに、また、しばしば抑圧的に作用する。しかし、いったん成立した価値規範もまた、永久に規範たりうるのかといえば、必ずしもそうではない。なるほど、規範が成立するに至るには、流行現象とおなじく、たとえ事後的にしか解明できないものであるにせよ、しかるべき必然的理由があってのことであるには違いない。とはいえ、規範もまた、あくまで社会的産物である限り人為的構築物に他ならず、その意味では、永久不変のものとは言い難い。── 1 日にして成らなかった「ローマ」もまた、決して滅亡と無縁ではありえなかった。──そのことは、今日、国際的な基軸通貨として栄華を誇っているドルや、国際共通語とされる英語の将来にも当てはまるものかも知れない。（かつて、時代と地域によっては、ラテン語やフランス語がそのような地位を占めていた歴史的事実がある）。

変容のメカニズム──「流行」現象を例として──

社会の大多数の人々によって支えられ、いったんは規範的価値と謳われた価値基準が大きく揺らぐ事態を想定すると、そこには、いかなるメカニズムが働いているのであろうか。ここでは、安易に同定すべきでないとはいえ、最も分かりやすい具体例として、流行現象を取り上げ、その変容のゆくたてを検討してみよう。

変化や変動を招来する要因として、純論理的には、「内から」と「外から」の二つの方向を考えることができる。まず内からのベクトルで「流行」の衰退を眺めてみると、そこには、価値の飽和状態という現象が認められよう。それはすなわち、新奇で魅力的と見えたがゆえに渇望の的であった非日常的なプラス価値が、社会にあまねく浸透することにより、何の変哲もない「ありきたり」のものへと陳腐化し、飽きられてしまうという事態に他ならない（＝非日常性の日常化）。むろんひとたびはプラス価値として崇め奉られたものが、たとえ「飽きられた」からといってすぐさまぞんざいに取り扱われるというわけではない。

しかしながら、「祀り捨て」という民俗的行事に見られる通リ、恭しく隔離されることによってもまた、価値規範の変容は生じうるものと見なければならない。

一方「外から」の変動要因としては、外来の異質な価値との接触ならびにその浸透といった動向を挙げることができる。（参照例：「異文化」接触とその受容）たとえば日本のように、歴史的・伝統的に長く閉鎖的であった共同社会においては、ローカルな価値意識の支配が強いので、ふつう異質な価値の受け入れに対しては事のほか慎重であり、かつ抵抗力もまた、とりわけ手ごわいのが常態であろうが、ひとたび受容するとなると、ことさら熱狂的に振る舞うのがもう一方の特徴であるとも言える。（参照例：ブランド品に対する盲目的なまでの憧れと信奉）そのことはまた、この国の情報空間があまりにも均質的であるために、流行のサイクルがひときわ早く、したがって陳腐化の速度もまた極端に速くなるという現象にも当てはまろう。（何ごとにつけ、通常、普及率が１０パーセントを超えるあたりから、流行の速度がいや増しに速まるものと見積もられている）。そうしたところでは、流行するが早いか、たちまちにして流行遅れと指弾され、簡単に祀り捨てられてしまうといった事態もあながち珍しいとは言えないのである。

規範的価値の変容と個人の主体的関与

「流行」とその衰退現象にみられるメカニズムが、また規範変容の過程にもそのまま当てはまると速断することには、きょくりょく慎重でなければなるまい。なぜなら、規範的価値は、すべからく「規範」としての地位を占めえた瞬間から自らを差別化し、その他大勢の個別的諸価値から超越した存在となるものだからである。とはいえ、ひとまず程度の差を措いていえば、「流行」の変化が、浸透と陳腐化のサイクルの上に成り立つのと同じように、規範変容のメカニズムもまた、社会構成体の変化に基づく「価値」の形骸化もしくは棚上げと無縁であるとも思われない。たとえば、数十年前の規範的価値が、世代の交代によってその意義を減じることは珍しいことではないし、また、他方では、時代遅れとなった価値であるのをあえて承知で、センチメンタルないしはノスタルジックに楽しむ旧世代と並んで、全く新たな流行として親しむすべを心得た新世代の登場も往々にして見られる現象である。（ここでは、詳述する余裕がないが、規範的価値にまつわる正負両様の両義的性格について、キッチュ、パロディー、パスティーシュ等々といった表現形態を比較しながら検討してみるこ

とも、あるいは興味深いことであろうと思われる)。

ところで、ひとは、いうまでもなく社会的動物であり、そうであるがゆえに共同主観を無視できず､社会共通の価値基準にも無頓着になれない存在である。ところが、他方、共同主観の方もまた、個別の具体的な個人主観と無縁に存立しうるというわけではない。むしろ個人主観の集合を核として、その上に立脚するのが共同主観であるとすると、両者はいわば相互補完ないしは相互作用の関係にあると見なければならない。しかも、いかに堅固に見える共同主観であってさえも、時代状況によって変容可能であるとすると、規範的価値の支配を永遠に改変不能の宿命として受け止めなければならない謂れはまったくないということになる。

共同主観はその特性上、自ずから抽象性を帯びざるをえないが、また、そうであるがゆえに個人主観との間に一定のズレないし齟齬が生じてくる可能性については先述した。そして、おそらくは、この間隙にこそ「規範的価値」の牙城に揺さぶりをかけ、新たな価値意識を生み出していく個人の主体的関与（パーソナル・コミットメント）を意義あらしめる余地と端緒があるのだと言っていい。この意味で、われわれは、自らの個人主観を絶えず鍛えることを最低の条件として、それを少なくともないがしろにしないだけの意気と自信を持つことが肝要なのだと思われる。(参照例：伝統と革新、「型」の継承と「創発」のメカニズム)

参考文献

カール・マルクスの諸著作、とりわけ『資本論』
フリードリヒ・ニーチェの諸著作、とりわけ『悲劇の誕生』
マイケル・ポランニーの「暗黙知」に関する諸著作